

## 京都府相楽郡『居籠祭り』にみる綱引きの構造と変容

田 簀 健 太 郎\*

(平成 10 年 10 月 20 日受付, 平成 10 年 12 月 21 日受理)

### The Structures and Cultural Changes of “Tug-of-War” into “Igomori Matsuri” of Soraku County in Kyoto Prefecture

Kentaro TAMINO

The purpose of this study is to clarify the structures and cultural changes of the tug-of-war with “Igomori matsuri” in Seika and Yamashiro, Soraku county, Kyoto, Japan by the method of cultural anthropology.

The study is examined from the following points of view. 1. The relation between historical background, natural features, topography and “Igomori matsuri”. 2. Analysis of festival organization in “Igomori matsuri” at present, changes in “Igomori matsuri” and tug-of-war are to clarify. And “Igomori matsuri” in both regions are to examine by the structures and oral tradition.

The findings of the study are as follows:

1) “Igomori matsuri” in Seika at present are possible to take one's place as festival event by analysis of festive organization “Igomori matsuri” at present. The other side, “Igomori matsuri” in Yamashiro are possible to take one's place as a festival event for the limited persons.

2) It made clearly that the cultural changes in “Igomori matsuri” was large by comparison “Igomori matsuri” with that at the present. So, as the festive organization changed, the form of “Igomori matsuri” have changed, and that with tug-of-war, anew. And from the structures and the oral traditions in “Igomori matsuri” in both regions (Seika, Yamashiro), that can regard as a festival. From above, “Igomori matsuri” is to clear that it relate to concerned society, accordingly a festival organization changed, “Tug-of-war” changed.

**Key words:** structures, organization, oral tradition, cultural changes

キーワード: 構造, 組織, 伝承, 変容

#### 1. 問題の所在

京都府相楽郡精華町では、「居籠祭り」<sup>いごもり</sup>という祭礼行事のなかで竹を材料にした綱の綱引きが行われている。この綱引きは、「実施される綱引きの『綱』は竹でできており、その形も特徴的で類型が見当らない。」<sup>2)</sup>と指摘されたり、「竹綱は、また、木津川に没しては人々を苦しめ、ついには退治された大蛇であるとも伝える。八岐大蛇に似た話である。」<sup>3)</sup>といわれている。これらの指摘は、この竹を材料として行われる綱引きがその実施形態としては他に類をみないほど特徴的であるだけでなく、当該社会と密接な関わりをもって行われていることを示唆するものである。また、精華町だけでなく、同じ相楽郡の

山城町<sup>やましよ</sup>でも「居籠祭り」という名称で祭礼行事が行われており、精華町の「居籠祭り」が綱引きに注目されているのに対し、山城町の「居籠祭り」は宮座によって行われることから、その運営母体が注目されている。これら二つの「居籠祭り」は、ともに「天下の奇祭」として行われているが、日程や行事内容は両地域で異なる。しかし、精華町と山城町が地理的にきわめて近く、同じ名称を用いて「居籠祭り」を実施していることから、精華町の綱引きだけでなく、両地域の「居籠祭り」を考察の対象とする。

以上を踏まえ、本研究は、京都府相楽郡の精華町および山城町の二つの「居籠祭り」を視野に入れながら、そ

\* 体育史研究室

こで行われる綱引きを民族誌的に描き、主として運営母体となる祭祀組織に着目することにより、綱引きが過去約100年の間にどのように変容し、現在に至ったのかを明らかにしようとするものである。

2. 調査地の概況—相楽郡の人口推移と産業形態の変化

京都府相楽郡は京都府の南に位置し、山城、木津、加茂、笠置、和束、精華の6町と南山城村の1村から構成されており、古代から京都、奈良、大阪の3都を結ぶ重要な交通の要地であった。

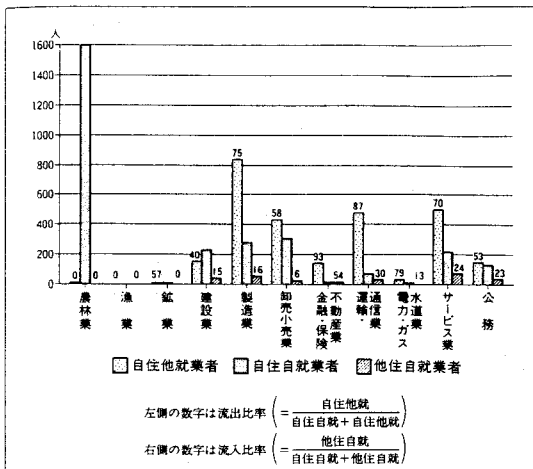
現在の相楽郡の各町村の人口を表したのが表1である。精華町と山城町の人口を比較すると明らかに差があり、この差の要因の一つは、地域開発に求めることができる。精華町では、地域開発が昭和30~60年(第I~III期)に行われ、特に近鉄京都線の東側には祝園団地と呼ばれる開発地区があり、中規模開発が大きく展開した。

表1 有楽郡の人口動態(平成7年1月1日現在)

町 名	人口(人)	前月11カ月の増減数	
		転入	転出
木津町	27048	15	22
加茂町	16834	118	131
笠置町	2243	39	32
和束町	6004	5	5
精 華 町	20908	10	12
山 城 町	9201	291	49
南山城村	4074	13	12

(吉田地図株式会社:『精密住宅地図』p. 29, より作成)

表2 昭和45年の就業構造(精華町史 p. 830より転載)



また、昭和62年からは、関西文化学術研究都市の開発とともに駅周辺などの整備が行われている。その結果、他の地域からの人口流入によって精華町の人口が増加したと考えられる。

一方、山城町でも「安らぎのあるふるさとをきざくまち山城」を基本目標とした総合計画や「創造とやすらぎが融合する文化回廊のまち山城」を掲げた「山城町第2次総合計画」を行ってきたが、基本目標が示すとおり自然や田畑を残すものであったために、急激な人口流入による町人口の増加には至らなかったと考えられる。このような人口の差は、両地域の社会に大きな影響を与えた

表3 昭和60年の就業構造(精華町史 p. 831より転載)

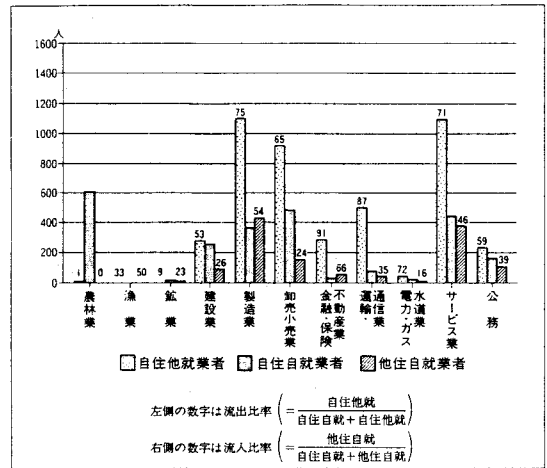


表4 産業大分類別従業者数と構成比の変化(山城町史 p. 57より転載)

	昭和30年(3町村)		昭和55年	
	総数	構成比	総数	構成比
農 業	1,504	43.0%	681	15.3%
林 業, 狩 猟 業	3	0.1	1	0.0
漁 業, 水産養殖業	0	—	0	—
鉱 業	32	0.9	5	0.1
建 設 業	151	4.4	340	7.6
製 造 業	530	15.4	1,152	25.8
卸 売・小 売 業	422	12.2	789	17.7
金 融・保 険・不 動 産 業	40	1.2	134	3.0
運 輸・通 信, その 他 の 公 益 事 業	335	9.7	465	10.4
サ ー ビ ス 業	316	9.2	674	15.1
公 務	117	3.4	220	4.9
分 類 不 能	0	—	2	0.0
計	3,450	100.1	4,463	99.9

と考えられる。すなわち、精華町と山城町とでは、祭礼行事の母体となる社会構造に大きな違いが生まれたといえよう。

次に相楽郡の産業をみると、全体的には田畑が多く農村社会の雰囲気呈している。中でも山城町では山城町農業を特色づける筍栽培が行われており竹林が多い。そして、表2,3,4から、昭和30年代から60年代にかけて両地域ともに第1次産業人口は減少の傾向にあり、第2・3次産業人口は増加の傾向にあるが、山城町よりも精華町の方が増加傾向にあるといえる。つまり、精華町の社会構造は山城町のそれよりも大きく変わっているといえよう。

3. 京都府相楽郡「居籠祭り」の実際と構造

1) 精華町「居籠祭り」の実際と運営母体の構造

「居籠祭り」の「居籠る」とは、具体的に祭事中、全村消灯し、物音を立てないで家の中に「こもる」ことを意味している<sup>4)</sup>。また、「居籠祭り」は、斎戒沐浴精進潔斎として行われ、昔は祭事中には音はもちろんのこと、火の使用も禁止されていたという。

「居籠祭り」は精華町の祝園神社で行われ、由来は以下のように伝えられている<sup>5)</sup>。

人皇第十代崇神天皇の御代、第八代孝元天皇の皇子、武埴彦彦が朝廷に反逆を企て遂にこの地に於て討伐されたが、亡魂、杵ノ森に止り、人民を悩ませしを第四十五代聖武天皇神龜年中に、これを撲滅せんとするも鬼神の所業なれば、人民にては如何ともなり難く、後年四十八代称徳天皇の御代、神力を以てこれを撲滅せよとの勅命により直臣大中臣池田六良広綱、宮城七良朝藤が、祝部となり、神護景雲四年一月二十一日春日の大神を御勸請し創祠された。而して斎戒沐浴精進祈願により、神力の擁護の基に遂に悪霊撲滅の難業なり、広綱、朝藤の功と相俟って漸く悪病平癒、人民安堵、農家の繁栄、商工業の

表5 祝園神社の「居籠祭り」

祭 日	儀 礼
12月の申の日(*)	御神祭り
1月の申の日(*) (第1日目)	風呂井の儀 松明の儀 綱曳の儀
(第2日目)	
(第3日目)	

(\*) 月に申の日が3回ある時は2回目、2回ある時は1回目の申の日

隆盛を見るに至った。

精華町の「居籠祭り」は、毎年1月の申の日から3日

表6 精華町祝園「居籠祭り」のスケジュール  
《御神祭り》(平成7年12月19日)

時間	行 事
17:40	拝殿へ宮司が行く
45	拝殿にて松明に点火
50	宮司が鈴を鳴らし小松明を持って井戸へ向かう
55	神事終了後、宮司が本殿へ帰る
18:10	片づけにはいる

第1日目(平成8年1月12日)

《風呂井の儀》

時間	行 事
17:15	鉦を鳥居下に立てる
18:15	松明に点火する
20	宮司が鈴を鳴らし小松明を持って井戸へ向かう
30	神事終了後、宮司が本殿へ帰る
35	松明奉持者が井戸へ向かう
38	宮司、松明奉持者が片づけに入る

第2日目(平成8年1月13日)

《御田の儀》

時間	行 事
19:15	社務所前に氏子が整列し、お祓いを受ける
20	拝殿にて松明が点火される
42	松明を拝殿から運び出す
48	拝殿を担いで幸の森へ向かう
20:25	幸の森から帰る
35	本殿にて松明奉持者お祓いを受ける
40	松明奉持者が五穀を配る
21:00	松明奉持者が付き人に挨拶した後直会が始まる

第3日目(平成8年1月14日)

《綱曳の儀》

時間	行 事
8:00	氏子が材料を切り出し、綱の作成に取りかかる
9:00	休 憩
~	
45	
11:00	綱を鳥居下に置く
14:55	宮司が鳥居まで来る
15:00	2手に分かれる
05	3回勝負で綱を引く
20	勝負後、綱を「幸の森」へ引いて行き、焼く
16:25	解散

間行われているが、前年の12月には「御神祭り」と呼ばれる祭礼行事が行われる。この「御神祭り」は、1月の「居籠祭り」の「風呂井の儀」とほとんど同様の神事であることや、前もって作られる松明3本の内の1本を使用することから、本研究では、「御神祭り」を含めて「居籠祭り」と称する。

「居籠祭り」は表5,6のスケジュール(平成8年の場合)で行われ(資料1参照)、特に1月の「居籠祭り」は、「神を迎え農耕を予祝するとともに年占いが祭りの中心になって(中略)神を迎え祭るため、氏子があげて忍み籠るといふ祭り本来の姿をとどめ、神と人との交歓の有様を今日に伝えるもの<sup>6)</sup>とされる。

12月の「御神祭り」に先立ち、氏子総代5名と松明奉持者と宮司の計7名で大松明1本と小松明2本が作られる。1月に入り、「居籠祭り」の第1日目の朝、各地区から2名ずつ計10名で図1のように浄砂を風呂井までの道と幸の森までの道に撒く。このとき撒かれる浄砂は以前は木津川の砂を採ってきていたが、現在は地区の業

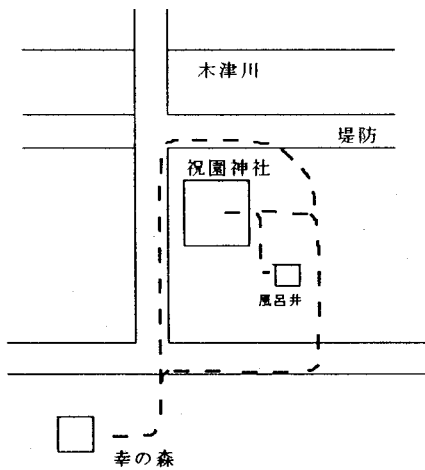


図1 浄砂を撒くコース

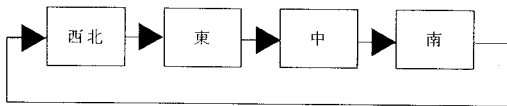
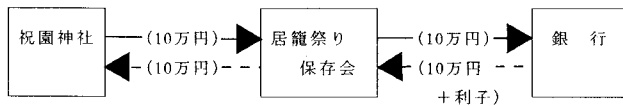


図2 松明奉持者のまわる順番

者の人から寄付される。「風呂井の儀」の前には世話役と呼ばれる人々が風呂井前の交差させた鉾をはずすなど、進行係のような仕事をする。風呂井の儀は望見を許さず、見ることはできない。第2日目の「御田の儀」では、宮司と「当日奉仕者」(世話役や助人・道具・囲いなどの役につく人々をまとめて呼ぶ)が実際に儀礼を行い、当日奉仕者は松明を持ったことのある者から選ばれる。そして、松明を持つ人は松明奉仕者と呼ばれ、御田の儀の最後に五穀を各区長に配る。この、松明奉仕者は図2のように毎年1名が各区から輪番制で選出される。御田の儀では、松明を燃やす場面や五穀を受け取る場面などは誰でも見ることができる。第3日目の綱曳の儀では、綱作りに各区から2名ずつ選出される。この2名のうち1名は氏子総代なので、各区からは1名を出すことになる。各区での話をまとめると「氏子総代が頼みにいったり、希望者がくればお願いするようにしている」という具合で人数の確保に努めているようである。こうして実施される「居籠祭り」は、「居籠祭り保存会」(以下、保存会と呼ぶ)によって保存されている。保存会は昭和54年に発足し、会長、副会長、会計の役がある。この3役は氏子総代から選ばれ、氏子総代は西北、東、中、南の各地区から1名ずつ出される。しかし、旧祝園地区が西、北、東、中、南の5地区に分かれていたため、現在でも西北からは2名の氏子総代が出される。氏子総代の任期は3年である。

保存会は、氏子全員によって構成される。なぜなら、氏子になると自動的に保存会員になるからである。保存会の運営費用は、まず神社から保存会へ10万円が貸し出され、次に保存会がそのお金を銀行に預金し、1年間の利子を運営費用に充てるという図3のシステムで捻出される。また、保存会は「居籠祭り」で使用する衣装や鉾などの備品を図4のシステムで購入する。「居籠祭り」は京都府無形民俗文化財に指定されているため、行政からの補助金がこのシステムで交付される。備品の購入は毎年ではなく、必要が生じた場合に限られるために、このシステムは通常利用されない。しかし、保存会は「居籠祭り」を実施するためには必要不可欠であり、経済的基盤であるといえよう。



\*年によって金利が違うために利子は安定していない。

図3 運営費用のシステム

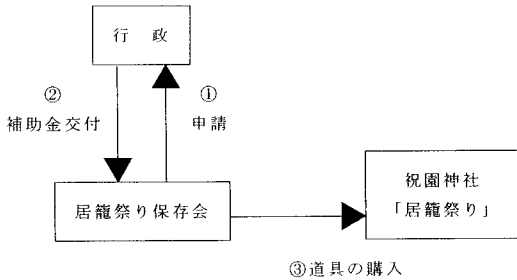


図4 補助金交付のシステム

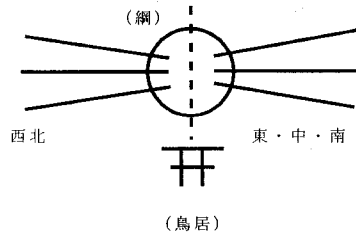


図5 綱引きの位置

2) 綱引きの実際と綱の構造

ここではまず、綱の作り方から綱引きの行い方に注目し、その後、綱のもつ象徴性の構造について考察する。綱引きで使用される竹の綱は、第3日目の朝に作られる。朝8時頃から氏子たちが神社に集まって作業を開始する。まず神社横と裏の竹藪に入り、綱に適当と思われる竹を切り出す。綱作りは大きく三つの作業に分かれて行う。一つのグループは竹の皮を剥ぐ仕事、もう一つのグループは竹の根元を焼いて、三角形に曲げる仕事、そしてもう一つのグループは綱の中心部分となる輪を作る仕事である。これらの作業は、長年同じ仕事をやっていたり、得意であるといった分かれ方で行われる。竹の皮を剥ぐ作業は、竹の葉の部分を切り落とし、竹を縦に8等分に割る。割った竹の皮と芯の間に鉋を入れ皮を剥いでいく。竹を曲げる作業は、まず竹の根元辺りの2カ所を火で炙る。この時、焼く時間が重要とされる。なぜなら、十分に焼かなかったり、焼き過ぎたりすると、綱を引くときに竹が切れてしまうからである。その後、炙った箇所を木槌で叩いてならし、その部分を曲げる。この作業を2回繰り返して三角形を作ってから、形が崩れないように縄で縛る。これを6本作って置いておく。綱の中心部分になる輪を作る作業は、はじめ葉の束をつなげて輪の形を作り、出来上がった輪の外に竹の皮を包むように巻いていく。竹を巻いた後、切り落とした竹の枝を輪に差し込みながらその上に巻いていく。最後に竹の皮で輪を螺旋状に巻いて、出来上がりである。輪が出来上がるとさきほど曲げた竹を左右に3本ずつ咬ます。輪に竹の皮を巻くときから、竹を咬ますまでは全員で作業を行う。出来上がった綱は、鳥居の下に輪の中心がくるように置かれる。鳥居には注連縄が張られた状態で、「綱曳の儀」まで置いておく。こうして作られる綱の形は、一般的な綱の形態と比べ極めてめずらしく、祝園地区の人々によって、「邪鬼を形取ったもの」とか「蛇の頭」などと言われていることは注目に値する。綱を作り終えた氏子たちは一旦帰路につき、午後3時頃に再び神社へ集

まる。

午後3時頃になると、祝園地区の人々が神社へ集まり、綱引きの準備ができると、宮司の合図とともに綱が引かれる。綱引きは3回勝負で行なわれるが、学校の運動会などで行われる綱引きとは綱を引く感じが異なる。なぜなら、綱の材料が竹で作られているためにしっかり握ることができないからである。また、中心にある輪が伸縮することによって、直接相手と引き合っている感じがしないのである。この綱を引く状態を稲垣は、「わたしたちが運動会などで体験している綱引きとちがって、『つな』を引いたときの感触がやわらかいのである。しかも、青竹は太すぎて手でしっかりと握ることはできないので、仕方なく脇にかかえこむようにしてからだを預けながらひく。したがって、みんなでゆさゆさ揺さぶっているような感じになる。』<sup>7)</sup>と述べている。

勝負が終えると「出森(武埴安彦が斬首されたといわれている場所)へ引いて行き、綱は適当な大きさに切られ、まとめて焼かれる。この時、各家庭の正月の注連縄なども一緒に焼かれる。すべて焼けるのを確認した後、三々五々家路へ着く。

綱引きは明治中頃から地区に分かれて引くようになった<sup>8)</sup>といわれるが、実際に鳥居を中心にして図5のように分かれて引き合わされる。しかし、調査時においては、厳密に分かれて引くのではなく、ある程度の人数が確保されると、それ以後に来た人々は地区に関係なく適当に分かれて綱を引いていた。それだけでなく、氏子だけに限らず「居籠祭り」に訪れた人々は誰でも参加して良いともいわれている。つまり、きわめて曖昧な分かれ方がされているといえよう。このほか、綱に身体をこすりつけ、自分の病気(病魔)を綱に移し、その綱を引き合うことで病気に打ち勝つことが綱引きの本来の意味といわれるが、「亥日、春日社鳥居前、村人南北ニ分列シ之ヲ牽ク。引き勝つ方ハ其年万事吉也」<sup>9)</sup>ともされ、どちらかが勝つとその年は万事吉であるとされていたこともうかがえる。しかし、ここからは、地域の人々がどのような原理で分かれていたのか読みとることができない。現在の

ように地区別に分かれていたのか、綱の形態上から適当に分かれて引かざるをえなかったのかという問題が残る。しかし、祝園地区の人々に聞くと「どちらかが勝っても豊作ということはないが、「そのような話は聞いたことがある」と言う。よって、これらを踏まえた上から判断すると、絶対年代を知ることはできないにしても、綱を引く意味が変化したといわねばならないであろう。

また、「風呂井の儀」、「御田の儀」がともに静けさの中で行われ、氏子総代や松明奉持者といった一部の代表的存在の人々によって行われるのに対し、「綱曳の儀」は祝園地区の氏子のみならず、他の地域の人々もこれに参加できることは注目できよう。つまり、綱引きは氏子組織だけでなく地域全体が参加できる儀礼の形態をとっているものであり、したがって、他の儀礼に比べて地域の人々に対して開放的であるといえよう。

次に、地域に伝わる綱引きに関する伝承をみると、綱の形は「邪鬼を形作ったもの」や「邪気に像ったもの」<sup>10)</sup>や「蛇の頭」などといわれる。これらの伝承では、綱は綱としてではなく、明らかに別の「モノ」(象徴的なもの)として捉えられているといつてよいだろう。このほか、武埴安彦が官軍によって首を斬られた時に、頭は「出森」に埋められ胴体は棚倉へもって行った、武埴安彦の争いの時棚倉の村人は官軍につき、祝園の村人は武埴安彦についたが武埴安彦が負けたので、勝った方の「居籠祭り」は豪勢であり負けた方の「居籠祭り」は静かに居籠るようになった、という口承がある。これらがすべて史実に基づいているかどうかがこの問題ではなく、少なくとも祝園の村人に伝承されており、何故この「居籠祭り」をするのかを説明しているところに重要な意味をもつといえる<sup>11)</sup>。その構造をみると明らかに棚倉(現=山城町)と祝園が対をなす概念として伝承に組み込まれており、棚倉が上位、祝園が下位という関係にあることがうかがえる。これらをまとめると、精華町の「居籠祭り」で行われる綱引きは、蛇として意識される。あるいは邪鬼のように「武埴安彦の説話」を現すものだと意識されているといえよう。

### 3) 山城町「居籠祭り」の実際と構造

山城町の「居籠祭り」は棚倉駅前<sup>わきでのみや</sup>に鎮座する湧出宮(和伎座天乃夫岐売神社)で毎年2月15日から3日間行われる。ここでも、精華町の「居籠祭り」と同様、前年の12月に予備祭ともいえる「もりまわし」が行われる。この「もりまわし」は、図6のコースをまわるものである。地域の人々は「もりまわし」を「居籠祭り」に際して、神様を勧請するために行なう」という。そのため、12月の「もりまわし」を含めて「居籠祭り」としてみ

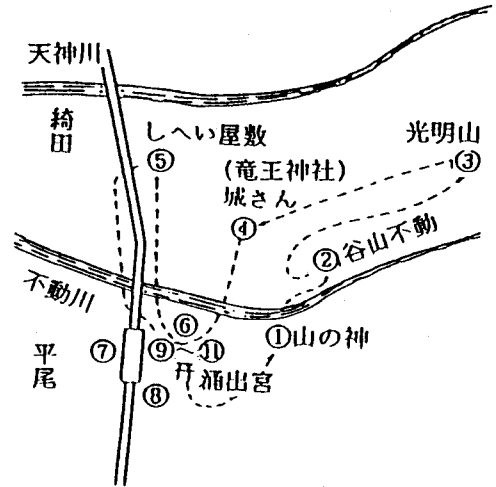


図6 「もりまわし」のコース(『いごもりまつり』湧出宮, 1985. 7, p. 8より転載)

表7 湧出宮の「居籠祭り」

祭 日	儀 礼
12月16日	もりまわし
2月14日	もりまわし
2月15日	松明作り 門の饗応 松明の儀
16日	歩射座かんじょ縄奉納 古川座かんじょ縄奉納
17日	饗応の準備 七度半の使い 饗応の儀 お田植え神事 かんじょ縄の取り替え 御供炊き神事

いくことにする。山城町の「居籠祭り」は、内容的に精華町のそれよりも豊富であり、表7, 8のスケジュール(平成8年の場合)で行われる(資料II参照)。ここでは特に2日目の歩射座のかんじょ縄奉納、古川座のかんじょ縄奉納、そして3日目のかんじょ縄の取り替えを中心に考える。

かんじょ縄は、古川座と歩射座のかんじょ縄の2本が湧出宮へ奉納されるが、古川座のかんじょ縄は細く、弓矢のセットを2組としきびのさがり24組をつけて作られる。もう一方の歩射座のかんじょ縄は太く作られ、につきの弓矢を2組とさがりを12組つけた上、歩射座のかんじょ縄を特徴づける大きなリング(男性の擧丸の

表8 山城町湧出宮「居籠祭り」のスケジュール

12月16日

時間	行事
深夜	もりまわし

第1日目(平成8年2月15日)

《たいまつ作り》

時間	行事
9:00 ～	たいまつ作り
11:00	
19:00	一般参拝者への神楽が始まる
19:40 ～	門の饗応
20:20	
20:25	たいまつ <small>の</small> 儀
22:40	たいまつ <small>の</small> 火が消される

第2日目(平成8年2月16日)

《歩射座と古川座のかんじょ縄奉納》

時間	行事
13:30	歩射座かんじょ縄奉納
14:20	古川座かんじょ縄奉納

第3日目(平成8年2月17日)

《七度半の使い》

時間	行事
10:00	七度半 <small>の</small> 使いが神社を出る
11:00	七度半 <small>の</small> 使いが神社へ帰る
14:00 ～	饗応が始まる
16:00	
17:00	かんじょ縄 <small>の</small> 取り替え

こと)をつけて「男の蛇」を表すように作られる。

このかんじょ縄には、奉納にまつわる伝承が残されている。歩射座の一老<sup>12)</sup>の話によれば、「昔、鳴子川を雄の大蛇が来て村の人々を悩ましていた。故に祝園(現=精華町祝園)の村人と平尾(現=山城町平尾)の村人が協力して雄の大蛇を退治した。その時から湧出宮ではかんじょ縄を奉納するようになった。そして、松明は蛇の胴である。また、祝園では綱引きを行うようになった。綱は蛇の頭である。」という。この話の中にもかんじょ縄が「蛇」と意識されていることは注目に値しよう。それは、八岐大蛇伝説を想起させるからである。寒川が、「大蛇退治を表象する綱引きは何らかの形で八岐大蛇退治神話と関わっているといつてよい」<sup>13)</sup>と述べることに従えば、

「かんじょ縄」も八岐大蛇伝説に関係するものとして考えることができる。こう考えた場合、山城町の「居籠祭り」が精華町のそれで行われる綱引きと同様にみることができよう。事実、山城町には蛇に纏わる次のような説話が残されており、井上が書き記している<sup>14)</sup>。

昔なりこ川(今鳴子川)へ東方の山から大蛇が度々来て人を悩まし子どもを取った。其れを聞き、江津の人身御供を年々食った大猿を殺した義侠の勇子が来て「ひらきの濱」で大蛇を待っていた。果して大蛇が現はれたので斬ったところ頭は祝園に飛び胴は棚倉に残った。村民が相談して胴は氏神の地に埋め、そのはふり棄てる状を残したのが居籠の儀である。

ここで注目すべきことは、どちらの伝承も「蛇」に纏わるものであり、明らかにかんじょ縄が「蛇」だと意識されているところに二つの話の共通点をみだせることである。一方でこの伝承の中に「祝園の村人」が出てくることも注目すべき点である。しかしながら、これだけでは説話のもつ構造をみることはできない。しかし、「居籠祭り」の由来と説話を比較すると、由来では武埴安彦が話の中心となっており、説話では祝園と棚倉、首と胴の関係で両地域が対立的に配置されていることがわかる。また、かんじょ縄の奉納についての伝承にも同様の構造がみられる。それは祝園と平尾、頭と胴である。すなわち、「かんじょ縄」は、祝園との関係の上に成立している儀礼であることが推測されるのである。

次に「居籠祭り」の運営母体に注目したい。「居籠祭り」の運営母体は宮座であり、それには古川座、歩射座、尾崎座、与力座がある。宮座については、伊東が「村内が家筋を中心にして宮座を結成し、その座が異なる役割をになっている姿は、近世社会に多くみうけられる年齢階梯を基軸とする宮座よりは、より古いあり方を残すもので、この祭りの経てきた長い歴史の断面をかい間見ることができる。」<sup>15)</sup>と述べている。これは、宮座によって行われる「居籠祭り」が近世以前にまで遡ることができるとしたもので、大変示唆的である。それは、「居籠祭り」の由来に関する説話<sup>16)</sup>を裏付けるものとみなすことができるからである。

宮座の構成メンバーは氏子であるとともに、それぞれの宮座に入る資格を有するものだけである。宮座に入る資格は表9にみるように宮座によってそれぞれ異なる。そこで、「居籠祭り」におけるそれぞれの宮座の役割と宮座の組織構造について考察する。

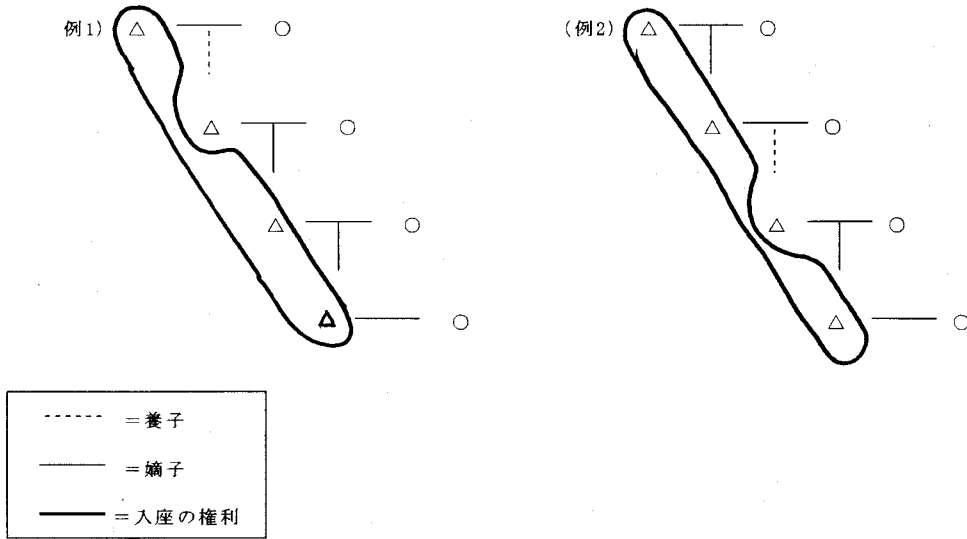


図7 入座システムの凡例

表9 宮座の居住地区と構成メンバー

居住地区	名称	構 成 員
埼玉	古川座	古川族
平尾	歩射座	田畑, 西, 倉, 森岡, 北村, 岡本の家筋
	尾崎座	尾崎一族
	与力座	大矢, 土矢, 中谷, 喜多の家筋

古川座は、「居籠祭り」では客体(お客)として扱われ、門の饗応、饗応の儀ともに拝殿中央に位置する。また、かんじょ縄の奉納を行う。古川座の居住地区は、平尾の北側に位置する綺田である。埼玉地区には綺原神社(綺原坐健伊那大比売神社)があり、古川座衆は綺原神社の氏子でもある。このような氏子の関係について着目した中村は、「二重氏子関係」の存在を指摘している<sup>17)</sup>。

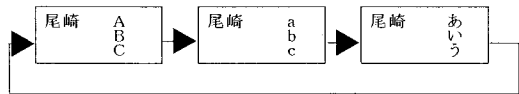
古川座十人衆は、年齢順で一老から順番に決まり、一老の任期は3年である。古川座には表9以外の家は入れないばかりか、図7のように養子は後継ぎであっても座に入れず、その息子の代から入ることができる。また、かんじょ縄は当家制<sup>18)</sup>で作られ、奉納する。当家は図8のように一老が3年勉めた後、次の1年に限り、十老が当家を務め、その後は新しい一老が3年それを務めるシステムで回る。

歩射座は、「饗応の儀」で拝殿右側に着座する。そして、古川座と同様、当家制によってかんじょ縄を作り、奉納する。現在、歩射座は全部で10軒あり、その中で当

当家の順番	一老	十老	一老	十老
務める年数	3年間	1年間	3年間	1年間

\*一老は3年間当家を務めた後、退く。その時に新しく十老が加わり、1年間当家を務める。つまり、一老と十老のみが当家を務める。

図8 古川座の当家制



\*尾崎座は3人1組で3年間「居籠祭り」へ参加し、3人は決まっている。つまり、6年ごとに「居籠祭り」へ参加する

図9 尾崎座の「居籠祭り」への参加システム

家が回る。歩射座の一老は、終身である。歩射座へは、希望すれば誰でも入ることができるが、現実には入座する者はなく、歩射座の家は減少している。

尾崎座は、現在、座としての活動は行っておらず、「饗応の儀」に出席するだけである。「饗応の儀」では拝殿左側に着座し、図9のように3人のみが出席する。尾崎座には尾崎一族しか入ることが許されておらず、家の数は減少している。

与力座は、「居籠祭り」全体の進行役ともいうべき宮座である。他の宮座のように十人衆はなく、3年交代の一老がいるだけである。一老は、「居籠祭り」の間ずっと神社で寝泊まりし、すべての儀礼に関わる。

以上のようにそれぞれの宮座は、年齢階梯にもとづく



祭祀長老制<sup>19)</sup>という点においては一致するが、その役割については分担され、相違がみられる。

続いて氏子組織に注目したい。「居籠祭り」が宮座によって行われることは先述したが、湧出宮にも氏子総代がいる限り、氏子総代と「居籠祭り」の関係を見捨てることはできない。氏子総代の数は、綺田地区と平尾地区からの計9名である。内訳は、各地区の北・南から2名ずつ、残りの1名は綺田地区から出される。現在は1名が欠員で8名のみである。

このように同じ「氏子」を組織の母体にしながらも、宮座の構成員になるための条件があるために、氏子組織と宮座組織の二つの組織が存在することになる。また、氏子組織で注目したいことは、北綺田、南綺田を含んだ行政区である綺田地区で氏子総代が5人出されることである。平尾地区の4名に対して綺田地区が1名多く出されることは、「居籠祭り」の伝承（精確には、門の饗応・饗応の儀に関する湧出宮氏子圏に伝わる伝承）からも興味深いところである。湧出宮氏子圏に伝わる伝承をまとめると、「古川座は、昔からこの土地に住んでいる。そして、歩射座・尾崎座・与力座の人々がこの土地へ来たときに農業技術を教えた。故に古川座の功績を讃えて饗応を行うようになった。そのため古川座は拝殿中央に着座して饗応を受ける。」となる。ここでは、古川座が他の宮座に対して上位にあるという構図をみてとれる。つまり、古川座は他の座に比べ、上位に位置づけられており、結果的にこのことが氏子総代選出の差になって現れ

ているといえよう。このほか、氏子組織とは別に「居籠祭り保存会」（以下、保存会）があるが、氏子総代の一人が会長を務め、副会長、会計などの役職はない。図10が保存会と氏子組織の現状を図式化したものである。保存会は、図11のシステムで「居籠祭り」で着る服装や使う道具などを修復したり、新調するときのみ機能する組織である。補助金の申請以外の活動は行っていない。つまり、他の組織とは違い、必要なときにのみ機能する組織である。このことは保存会の不要性を認めるものではなく、保存会が購入した道具や衣装が「居籠祭り」で使用されていることから、欠くことのできない存在として位置づけることができる。

#### 4. 「居籠祭り」の変容と両地域の共通性

##### 1) 「居籠祭り」の変容

###### a) 精華町「居籠祭り」の変容

精華町は、水害が多かった地域であったため、木津川沿いに位置する祝園神社も同様、水害にあっており、「居籠祭り」に関する古文書が残されていない。そのため、過去に行われていた「居籠祭り」の様式を完全に一致した年代で再構成することは、史料的に限界があるといわねばならない。そこで限られた史料を中心として過去の「居籠祭り」を再構成し、現在がどのように変容したのか考えてみたい。長くなるが、まずは1676（延宝4）年の記録を確認しておく<sup>20)</sup>。

居籠祭りの保存会		氏子組織			
会長 1名		氏子総代 9名			
綺田地区 氏子	平尾地区 氏子	綺田地区		平尾地区	
		北綺田	南綺田	北平尾	南平尾
		2名	2名	2名	2名

図10 氏子組織と保存会

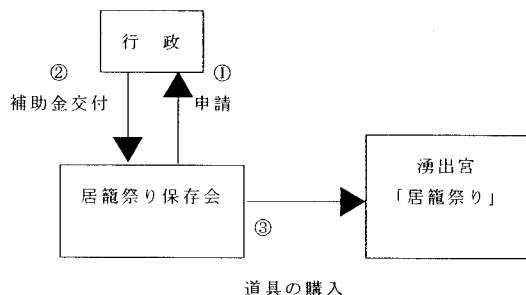


図11 補助金の交付システム

初申ノ日ヨリ亥朝ニ至リ、和州柞森ノ土人居籠ヲ作ス。(中略) 各畜ル所ノ牛馬鶏犬ヲ他村ニ託シ、用ル所ノ食物預メ之ヲ経営シ、門戸ニ至テハ亦開闢ノ音ヲ禁ジル故ニ筵ヲ垂テ戸ヲ掩ハズ、一家ノ中ニ而処炭火油燈ヲ設ケ昼夜断絶セシメズ。火滅スルト雖モ之ヲ鑽ルコト能ハザル也。其一村ノ人悉ク精進潔斎シ、男女混雜シテ雜戯雜遊ヲ作ス。然シ微音ニシテ言ヲ揚ゲズ。谷ニ音有ラバ即チ之ヲ窺ウ也。第三ヶ日戌夜、当地春日明神ヲ西野ニ移ス。是ヲ神幸ト謂フ。地人覆面ヲ垂レ大松明ヲ持チ前馳シ、神主其亦夕覆面ヲ垂レ鈴ヲ鳴シテ行ク。布帛ヲ以テ顔面ヲ覆ヒ纒ニ両眼ヲ出ス是ヲ覆面ト謂フ。凡鋤鉋等一切ノ農具、数人携行シ、又五穀ノ種ヲ混雜シ而シテ一器ニ盛り、土人担テ西野ニ行キ神主ノ前ニ置ク。村人悉ク斯ノ処ニ聚リ、大ニ伊呉美与ト呼フ也。云々ハ民間混雜ノ詞也。神主茲ニ於テ、五穀混淆之種一手之ヲ掬ヒ以テ村人等に授ク。其ノ領納スル所ノ内其ノ種多キ者之ヲ種レバ即チ実熟ス。事終ッテ還幸、又預メ屠人ニ令シ、青竹ナル者三株ヲ採、

経五尺ノ輪ヲ造り藤蔓ヲ以テ之ヲ纏ヒ、又別ノ大竹三株其ノ末ヲ揉テ竹輪ノ左右ニ是又タ藤蔓ヲ以テ之ヲ纏ヒ著セシメ、破裂ニ至ラザラセシム。亥日、春日社鳥居前、村人南北ニ分列シ之ヲ牽ク。引キ勝ツ方ハ其年万事吉也。且ハ古明神悪鬼ノ首ヲ祓フノ遺風也。

これは、祭りの全容を明らかにするものではなく、現在の2日目の御田の儀と3日目の綱曳の儀の大まかなところを述べたものにすぎない。ともあれ、植木が述べるように「その記述はきわめて具体的であり、かつ要を得たもの」<sup>21)</sup>といえる。ここでは、御田の儀が村人たちによって見られていたこと、宮司が覆面をしていたこと、松明奉持者も覆面をしていたこと、綱の材料に藤蔓を使用していたことなどを知ることができる。この史料に加え、過去の拠り所として井上によって著された『改訂 京都民俗志』を挙げることができる。この史料から少なくとも昭和4年当時の「居籠祭り」をここから垣間みることができるからである。その中に、「座の存在すら老人がわずかに記憶していただけであった。」<sup>22)</sup>とあることや、本調査において宮座が祝園に存在していたという話を聞くことができたことから、大正13年以前には宮座が存在し、それが祝園地域の行事に携わっていたと推測できる。しかしながら、現在では、宮座についての詳細な情報を入手することは困難である。

次に、先掲の史料をもとに実施形態の変化をみておきたい。「御神祭り」自体は、過去とほとんど変わりなく続けられている。しかし、全く変化していないわけではない。松明を作る日が御神祭りの当日の朝からその週の前の日曜日、つまり、休日に変化したこと、宮司と松明奉持者の2名で松明を作っていたことから各地区の氏子総代5名が加わって一緒に作るようになったこと、および綱を作るときに「あぜまめ」のからを芯にして竹で包み縄で縛るのではなく、藁をつないでから竹で包み縄で縛るといったことなどの準備や材料に変化がみられる。

また、第2日目の御田の儀でも現在と異なる点が見られ、村人が見ている中を宮司と松明奉持者が覆面をして「幸の森」へ向かっていたとされるが、現在では宮司、松明奉持者ともに覆面はせず、「囲い持ち」と呼ばれる役によって隠されている。「幸の森」へ向かう人数は、宮司と当日奉仕者6名から宮司と当日奉仕者12名（助入6名、道具2名、囲い4名）へ増えている。さらに現在では、松明が境内から出される時、「もうでござい」の掛け声で「場内にいる参詣者はみなかんで脱帽」<sup>23)</sup>、「これを聞くと村全体が消燈し、一切無音無言で微音さえ立て

ず、祭りのすむまで厳重に屋内で謹慎している」<sup>24)</sup>といった以前の習俗は薄れている。

第3日目の綱曳の儀では、綱の形に変化はみられないが、材料が変化したこと、綱を引くとき、壊れるまで引き合っていたことからそうでなくなったこと、また、4日目に行われていた綱引きが、現在では第3日目に行われていること、綱の引き手の分かれ方は、誰でも好きなところをもって引き合っていたのが、綱をはさんで西北と東、中、南に分かれて引くように明治中頃に変化したとされていることに、変化をみだすことができる。なお、この引き手の分かれ方の変化が、「無病息災を願う綱引き」から「勝ったほうに幸いがもたらされ豊作になる」<sup>25)</sup>ことや「結果によってその年の農作物の豊凶が占われる」<sup>26)</sup>との解釈をもたらしたと思われる。綱を引く意味の変化については、「本来は邪気に像った綱に身体をこすりつけ、自己の病魔（悪病）を委譲し、その病魔と曳きあい病気に勝つといういわれがあったが、明治の中頃よりただ勝敗のみをけつるようになったことは遺憾に思う。」<sup>27)</sup>と言われたり、また「出森」へ運び焼却するときに、神社では「鎮霊と悪病平癒ならびに厄除けの祈願神事が行われている」<sup>28)</sup>ということからも、「無病息災」の綱引きが「豊凶を占う」綱引きに変化したともいえるが、現在ではそのどちらともいえない状況である。ともあれ、綱引きの後、以前は「勝った方は大喜びで凱歌をあげ、社前一六五メートル位の所にある『いずもり』という地に引っぱって」<sup>29)</sup>行ったが、現在では綱引きを行った人全員で引いて行くようになった。

運営母体となる祭祀組織については、昭和54年以前にはなかった保存会ができたことで、これまで神社が支出していた「居籠祭り」の費用を保存会が受け持つようになったことや、宮座組織から氏子組織に変化したことが推測されることが挙げられる。当該の宮座について井上が次のような調査結果を報告している<sup>30)</sup>。

江戸時代には座があったということである。南北に分かれて竹の輪を引くところを見ると、付近の他村落の例からおして、あるいは座が二つあったのであるかも知れないが、わからない。現存の古老全部についてかろうじて聞き得たことは、「先代の森島という人が座を廃した」「座には外来者はいかなる富者といえども一切仲間へ入れない」「昔は座に一老があって、服装は大人は白の袴、子供は緋の袴を着けた」「座の内にむしゃというものがあって武士と書いた」の数項にすぎなかった。

このように井上が調査を行った昭和4年当時には、すでに宮座の詳細については知ることができない状態であったが、宮座が存在していたこと、宮座には一老がいたことなどは知ることができる。また、井上も推測しているように、宮座の数は現在の綱引きから二つであったと推測することも可能である。ともあれ、ここからかつて宮座が存在していたが現在では無くなり、氏子組織にとって変えられているといわねばなるまい。

注目すべきは宮座組織から氏子組織へ変化したことである。宮座の活動や構成が不明であることから断言はできないが、現在の山城町の宮座を参考にした場合、祝園地区に存在した宮座も山城町の宮座と同様に特定の家筋によって構成されていたと考えられる。このような宮座であった場合、現在の「居籠祭り」を支える祭祀組織である氏子組織が地域に対して開放的であることから、閉鎖的な「居籠祭り」から開放的な「居籠祭り」へと変化したと推測される。また、宮座組織から氏子組織への変化は、宮座組織では「居籠祭り」を存続することができない状況が起きたからと考えることができる。

さらに、「居籠祭り」の最大の変化は、嚴重に「居籠る」ことがなくなったことであろう。では、過去にはどのように居籠っていたのであろうか。そのことを知る手がかりとして次の文を確認しておきたい<sup>31)</sup>。

各畜所ノ牛馬鶏犬ヲ他村ニ託シ、用ル所ノ食物預メ之ヲ経営シ、門戸ニ至テハ亦開闔ノ音ヲ禁ヅル故ニ筵ヲ垂テ戸ヲ掩ハズ、一家ノ中ニ兩処炭火油燈ヲ設ケ昼夜断絶セシメズ。火滅スルト雖モ之ヲ鑽ルコト能ハザル也。

このように、「居籠祭り」が始まる前に家畜を他村へあずかってもらい、音を立てないように最大限の気を使っていたことがわかる。しかし、現在では「居籠祭り」の3日間においても普段の日常生活と変わらない生活を送っており、筵を吊るすような家も現在ではほとんど見ることができなくなった。また、筆者が風呂井の儀の調査中に、「参りに来たのに鉢を立ててどうすんのじゃ。かまへん。入ってこい、入ってこい!」と大声で言われたことから、地域の人々が古い風習にこだわらなくなったことがうかがえる。

#### b) 山城町「居籠祭り」の変容

精華町につづき、山城町の「居籠祭り」の再構成し、現在がどのように変化したのかみていくが、ここでも史料の限界があり、井上の調査に頼らざるをえない。

第1日目に行われる「門の儀」では、古川座、歩射座、

尾崎座そして、与力座から出される板元・給仕の着座位置と待機位置が違うばかりでなく、「門の儀」を行う場所そのものが拝殿の外だったのが、拝殿の中で行うようになった。また、板元・給仕のほかに4人の「たっちゃん」と称する役があったのが、現在では存在しない。この「たっちゃん」が木村座と称する宮座によって担われていたことは注目に値する。また、古川座のみ響応するのであって他の宮座には一切おかまいなしという状態で「門の儀」が行われていた様式から、現在ではすべての宮座に響応が行われるようになった。

「松明の儀」では、以前は松明を「斎庭で十分にじって転がして回」<sup>32)</sup>していたが、現在では松明に点火した後、その場で最後まで燃やしてしまうようになった。この所作を地域の人々は、「松明をなぐさむ」といっていたようであるが、意味は不明である。

第2日目、江戸時代には「著作り」を行っていたが、現在は歩射座・古川座の両かんじょ縄が奉納されるだけである。また、「祭神三座ゆえ一度に三本を要し、都合一年分、約二百本を二日目に作った」<sup>33)</sup>とされており、現在作る箸の数はかなり少なくなったといえる。つまり、以前はそれだけ「著作り」に従事する人が多かったのが、現在は減少したと考えられる。かんじょ縄においても江戸時代にはリングを3個つけていたが、現在はつけていない。かんじょ縄に対して、井上が以下のような示唆的な見解を述べている<sup>34)</sup>。

おそらく古い時代には、参道の入り口に一对自然木があり、それに張ったものであったが、宮寺の建築がはいつて四脚門ができたので、掛け場を移して門の東に巻き付けることとなったのであろう。東に巻きつける形式となつての後も、元の自然木へかけた名残りがいまだに残っていて、最初社へもつてくるとき、今も椿と杉との間へ両端を釣る風習となつたものであろうと思われる。

つまり、元来木の間に掛けていたものが、現在の湧出宮の門の梁の上にかんじょ縄を結びつける様式に変化したというのである。そして、現在の様式は、過去に行われていた「かんじょ縄の奉納」の名残というわけである。井上のこの見解は大変示唆的であるが、裏付けがなされていない以上、即、史実と判断することはできない。しかし、さらに井上は、「明治維新後こそ多少の変化はあるが、それ以前はおそらく乱れる機会が絶対になかったと認められる。」<sup>35)</sup>と述べる。このことは、平成4年頃の「居籠祭り」について著した加藤の見解「近年湧出宮の居

籠祭りは古習を失ったと古老は言うが、それでも神事は古態を保ちながら厳格である。<sup>36)</sup>とも符合する。

「居籠祭り」の3日間、社務所の神楽殿で一般参拝者に対して「神楽」が行われる。この神楽は、元来無かったもので、昭和25年頃から先代の宮司によって始められた。このように祭りの全体の姿は昭和8年頃と現在では大体において変化はないが、祝園と同じく「居籠祭り」の本来の意味である、「忌み」「籠る」ことの意識が薄れているといわねばならない。なぜなら、音を立てない「音無しの祭り」として有名な「居籠祭り」では、音を出すことは最も慎まなければならない事柄であったからである。

## 2) 「居籠祭り」の共通性

### a) 「居籠祭り」の全体的構造と氏子圏の構造の共通性

これまでみてきたように、それぞれの「居籠祭り」は関係性をもっていることが推測される。したがって、ここでは「居籠祭り」の変化を視野に入れながらそれぞれをみていきたい。そこでまず「居籠祭り」の全体像を構造的に考えたい。

現在、精華町の「居籠祭り」は、1月の3日間で山城町の「居籠祭り」は2月の3日間で行われている。しかし、山城町の「居籠祭り」もかつては1月に行われていたという。過去に行われていた祭日については、1)「正月二の午の日が「入り」で、申の日の深夜に至って「あき」となる<sup>37)</sup>、2)祝園と同じように決められた1月の申の日に「居籠祭り」を行っていた<sup>38)</sup>、3)数え方は祝園と同じであるが、申の日ではなく午の日を数えていた<sup>39)</sup>、と

表 10 祝園及び平尾の「居籠祭り」の構造

行 事		
	御神祭り	もりまわし
1日目	風呂井の儀	箸削り 松明作り 古川座かんじょ縄作り 門の饗応 たいまつ <small>の儀</small> 野塚神事
2日目	松明の儀	がんじょ <small>の</small> 奉納
3日目	綱曳の儀	饗応の準備 七度半の使い 饗応の儀式 お田植 <small>え</small> 神事 かんじょ <small>の</small> 縄の取り替え 御供炊き神事 四ツ塚神事

いったように定まっていない。どの伝承が史実に基づいているかの判断は困難であるが、共通しているのは、「居籠祭り」が行われていた月が1月であったという点である。つまり、山城町「居籠祭り」が祝園神社のそれと同じ1月に行われていたことがうかがわれる。また、祭礼の3日間に先立ち、前年の12月に精華町では「御神祭り」、山城町では「もりまわし」というように「居籠祭り」の予備祭がともに行われる点でも共通している。そこで精華町、山城町のそれぞれの「居籠祭り」を整理すると表10のようになる。このように行事内容は異なるものの、同じ構造と見なすことができよう

次に、それぞれの「居籠祭り」の氏子圏の構造を考えたい。それぞれの氏子が属しているのは祝園地区では祝園神社であり、平尾地区では湧出宮であることは先述したとおりである。祝園の氏子は基本的に各区から直接神社の氏子になるが、中区に限ってはその構造が異なる。他の地区には神社はないが、中区には昭和20年4月に祝園神社の末社に指定された「若宮神社」があり、神社の祭礼行事は中区の人々によって行われる。つまり、中区の人々は、井上のいう二重氏子関係といえる。加えて、若宮神社の宮司は、祝園神社の宮司が兼任している。湧出宮でも先述したとおり、綺田地区に住む古川座が、湧出宮と綺原神社の二重氏子である。このようにそれぞれの地域における氏子圏の構造においても非常に類似している。つまり、祝園神社でも湧出宮でも二重氏子を抱える神社という点では共通しているのである。このことから短絡的に祝園と山城町を結びつけることは避けなければならないが、「居籠祭り」の構造と氏子圏の構造から、二つの地域の「居籠祭り」は、同じ構造をもって行われているといえる。すなわち、二つの「居籠祭り」は構造的に同じ祭礼行事としてみることもできるのである。

### b) 精華町および山城町の歴史的背景と口頭伝承の構造にみる共通性

精華町と山城町は、地理的にも歴史的にも共通項を多くもつ地域であることは先に述べた。さらに両地域には同じ武埴安彦の説話が存在する点においても共通している。武埴安彦の説話は「居籠祭り」の起源に触れるものであり、稲垣が次のよう述べている<sup>40)</sup>。

この武埴安彦の謀叛については『日本書紀』中巻に詳しい記載があるものの、謀叛の背景についてはなにも触れていない。ただ、崇神天皇の使者がこの地を通りかかったとき、一人の童女が口ずさんでいた歌を聞きとがめて、武埴安彦の謀叛を知ったということを書き残しているだけである。この不自然さ

に着目してみると、どうやら崇神天皇の方に攻められるべき理由があったように読みとることができそうである。

つまり、武埴安彦の反乱は崇神天皇に非があり、それに対する武埴安彦の正当な行動であるという。また、武埴安彦の霊を鎮めるため、「怨霊封じの神事を執り行わなければならないかった」<sup>(41)</sup>としている点は「居籠祭り」の起源を考察するうえで大変示唆的である。また、これまで述べてきたように、精華町と山城町はその歴史的過程の中で少なくとも接触があり、同じ説話が両地域に存在することから受け入れる母体が同様であったと推測できる。

二つの地域の歴史的背景の構造とは別に、両地域を結びつける口承があり、それらをまとめると以下のようになる。

- ・武埴安彦が官軍に謀反を起こし、破れた。そのとき祝園の地に陣を構えたのが武埴安彦であり、平尾の地に陣を構えたのが官軍であった。それゆえ勝った方の湧出宮では盛大に「居籠祭り」が行われ、負けた方の祝園では厳粛に「忌み籠もる」ようになった。
- ・武埴安彦が破れて首を斬られたとき、斬られた首は祝園の地で埋められ、胴は湧出宮に埋められた。
- ・祝園「居籠祭り」の綱引きの綱は武埴安彦の頭であり、湧出宮「居籠祭り」の松明は武埴安彦の胴体である。
- ・昔鳴子川に大蛇が現れ、人々を悩ました。その大蛇を退治するために祝園の村人と平尾の村人が協力して退治した。そのときの名残で湧出宮に「かんじょ縄」が奉納されるようになった。そして、祝園の綱はその大蛇の頭を形取ったものである。
- ・祝園の綱引きで使用する綱は蛇の頭を形取ったものである。

このように、それぞれの口承の中では祝園と平尾が何らかの関係があるといえる。

先述したように「綱曳の儀」と「かんじょ縄の奉納」を「綱の儀礼」とし、組織形態なども視野に入れて、項目ごとに対比させると表 11 になる。ここからも祝園の綱が頭であり、平尾の松明が胴体という対応関係がみとれ、祝園神社で行われる「綱曳の儀」と湧出宮で行われる「かんじょ縄の奉納」は、一対の「綱儀礼」としてみることを裏付けることになろう。また、祭日が同じ 1 月であったことや組織形態が同様に宮座であったこと、武埴安彦の説話のみならずそれぞれの地域の口承においても両地域が組み込まれて語られていることなどから推

表 11 祝園及び平尾の対比

項目/地域	精華町	山城町
「居籠祭り」の月	1月	2月(注1)
綱の儀礼	綱曳の儀	かんじょ縄の奉納
綱と松明の関係	頭(首)	胴
武埴安彦の乱	角け	勝ち
地理的特色	平地	山地
組織形態	氏子組織(注2)	宮座組織

(注1) 以前は 1 月に行われていた。

(注2) 以前は宮座組織が存在していた。

察して、両者の「居籠祭り」は対応関係にあり、それぞれが無事に執り行われることによって、この対をなす地域の「居籠祭り」は完成するといえよう。

## 結 語

精華町と山城町の両地域の「居籠祭り」の変容をみることで、綱引きがどのように変容し、現在に至っているのかを検討してきた。その結果をまとめると、以下の事柄が明らかにされた。

- ・現在の「居籠祭り」の運営母体は、宮座組織から氏子組織へと変化したことが確認された。しかしながら、年代を特定できるだけの史料が無いため、絶対年代を知ることはできなかった。ただし、井上の調査からすでに大正 13 年には氏子組織に変化していたことがわかる。
- ・「居籠祭り」が変化した理由としては、祭祀組織の構造の変化が上げられる。地域開発の結果、人口の流入により、在来の伝統的文化に影響を及ぼすことになったことが考えられるからである。このことが第 1 次産業を背景として行われてきた「居籠祭り」を変容させることになったともいえよう。
- ・「居籠祭り」で行われている綱引きは、担い手が宮座組織から氏子組織に変化したと伝えられている。これに伴って、宮座組織という限定された構成員による組織に基づく祭礼行事から、当該地域の住人のすべてを氏子として抱え込む組織に基づいた祭礼行事へと変化したといえる。
- ・綱引きの目的が、「無病息災」から「勝負を重視するようになった」と言われているが、これは綱の引き手の分かれ方の変化によって知ることができる。しかし、近年では、「無病息災」や「豊凶の占い」、そして「勝負」の機能のどれも薄れているといわねばならない。
- ・両地域の「居籠祭り」は、対応関係にあり一対の祭

礼行事であったと見なすことができる。しかしながら、現在では両地域ともに「居籠祭り」の本来の機能が失われているといわねばならない。

### 謝 辞

本調査を進めるにあたって神戸市外国語大学の竹谷和之先生には、本研究に関わる貴重な助言を頂きました。また、たくさんの方々にも多大なご協力を賜りました。とくに精華町教育委員会の村川氏、祝園神社氏子総代の西村氏、川崎氏、与力座の喜多氏、大矢氏には貴重な情報を提供して頂きました。ここに記して心より感謝の意を表します。

(なお、本研究は平成8年のフィールドワークで得た資料を中心にしている。)

### 注記および引用参考文献

- 1) 京都府相楽郡精華町の「居籠祭り」は、1990年1月にスポーツ人類学専門分科会第1回合同フィールドワークで調査されたが、精華町のみ調査であった。
- 2) 竹谷和之：京都山城地方のエスニック・スポーツ—祝園神社・居籠祭の綱引—、『日本体育学会第41回大会号B』、スポーツ人類学シンポジウム、p. 432, 1990.  
また、竹谷氏はこの綱引きを「鎮魂、農耕儀礼、悪病平癒の祈願を中心としている習俗である」と結論づけている。
- 3) 寒川恒夫：祝園神社「いごもり祭り」の綱引、「みんなのスポーツ」、第15巻第6号、日本体育社、p. 56, 1993. 6.
- 4) 西角井正慶編著：『年中行事辞典』東京堂出版、p. 39, 1975. 8.
- 5) 精華町史編さん委員会編集：『精華町の史跡と民俗』精華町、p. 69, 1993. 9.
- 6) 精華町文化財愛護会：「文化財愛護会だより」第12号、p. 19, 1995. 3.
- 7) 稲垣正浩著：『スポーツの後近代』、三省堂、p. 97, 1995. 7.
- 8) 祝園神社の宮司の話であるが、この他、精華町史編さん委員会編集：『精華町の史跡と民俗』精華町、p. 74, 1993. 9にその記述が見られる。
- 9) 谷川健一編集：『日本の神々—神社と聖地（全13巻）』、白水社、p. 269, 1990. 4.
- 10) 精華町史編さん委員会編集：前掲書、p. 74.
- 11) 寒川恒夫：説話とスポーツ、「体育の科学」杏林書院、p. 621, 1988. 8.
- 12) 歩射座の一老であるT氏は当時91才であり、この伝承を子供の頃に聞いたという。

また、ここでいう一老とは、この地域の宮座には年齢階梯制（注記19参照）に基づいた一老から十老までの十人衆と呼ばれる年長者がおり、そ

の中の一老のことである。一老の任期は宮座で異なり、古川座、与力座はともに3年交代、尾崎座には一老は存在しない。

- 13) 寒川恒夫：綱引きのコスモロジー、「月刊百科」8号、平凡社、p. 20, 1990.
- 14) 井上頼寿著：『京都民俗志』岡書院、p. 566, 1933. 9.
- 15) 伊東久之：居籠り祭り『探訪神々のふる里・平安京の神々』小学館、p. 135, 1982. 8.
- 16) 井上の研究によれば、以下のような説話が伝えられている。

(一) 伊伍毛利の初めは建波迹安王が邪心を起こして皇軍に破られ、その霊がたたったので村民が齋み籠ったら鎮まった、それが例となった。

(二) 武埴安彦を破斬したら首が祝園に飛んだ。第三日に引きあう竹輪はそれにかたどる。胴は棚倉へ飛んだ。第一日に転倒して弄る大松明はそれにかたどったものである。

(三) 獅子が空から降って空中で解体した。その首が祝園、胴が棚倉、尾が江津に落ちた。それを慰めるために居籠をした。

(四) 昔なりこ川（今、鳴子川）へ東方の山から大蛇がたびたび来て、人を悩まし子供を取った。それを聞き、江津の人身御供を年々食った大猿を殺した義侠の勇士が来て、「ひらきの浜」で大蛇を待っていた。はたして大蛇が現れたので斬ったところ、首は祝園に飛び、胴は棚倉に残った。村民が相談して胴は氏神の地に埋め、そのはふりすてる状を残したのが居籠の儀である。

井上頼寿著：『改訂 京都民俗志』、平凡社、p. 301, 1974. 7.

- 17) 中村は二重氏子関係を次のように指摘している。  
旧棚倉村のうち鳥居には高倉神社、西平尾（榎堂）には春日神社、万儀（上ノ茶屋）には春日神社（この神社は現在涌出宮に合祀されている）があり、これらの神社はそれぞれの地区に独自の氏子組織（宮座）をもち涌出宮の祭礼に直接関係していない。また、鳥居を除く綺田地区を氏子圏にもつ綺原神社があるが、この神社の氏子は大宮さん（涌出宮）との結びつきも強く、涌出宮の居籠祭で正客として参列する古川座は綺原神社の氏子でもある。このように涌出宮は旧棚倉村のほぼ全域の氏神でありながら、氏子の多くが他の社との二重氏子という関係にある。

中村 彰：宮座と祭祀—棚倉湧出宮の場合、『京都の田遊び調査報告書』、京都府教育委員会、p. 114, 1979. 3.

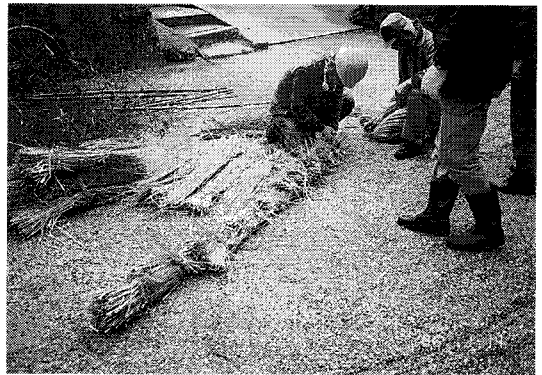
- 18) 神社祭祀において、順次に当番として行われる制度のことである。頭屋制ともいう。
- 19) 高橋の説に従えば、各集団間に一貫した厳しい年長序列関係制度を年齢階梯制というが、とくに宮座では神社祭祀の実権が長老衆にあるので、大別すると、若者組を主とする若者階梯型と長老衆を

- 主とする長老階梯型の2種類に分けることができる。しかし、原理上は年齢階梯制の一環としての祭祀長老制を規定できる、とされている。
- 高橋統一著：『宮座の構造と変化』、未来社、1978。  
高橋統一：年齢階梯制『文化人類学事典』所収、弘文堂、pp. 572-573, 1994. 3.
- 20) 谷川健一編集：『日本の神々—神社と聖地（全13巻）』白水社、pp. 268-269, 1990. 4.
- 21) 谷川健一編集：同上書、p. 269.
- 22) 井上頼寿著：『改訂 京都民俗志』、平凡社、p. 262, 1974. 7.
- 23) 井上頼寿著：同上書、p. 259.
- 24) 井上頼寿著：同上書、p. 260.
- 25) 「亥日、春日社鳥居前、村人南北ニ分列シ之ヲ牽ク。」とされている。現在綱引きは第3日目に行われており、明らかに現在の日程と異なる。  
谷川健一編集：前掲書、p. 268.
- 26) 井上頼寿著：前掲書、p. 261.
- 27) 精華町史編さん委員会編集：前掲書、p. 74.
- 28) 精華町史編さん委員会編集：前掲書、p. 74.
- 29) 井上頼寿著：前掲書、p. 261.
- 30) 井上頼寿著：前掲書、p. 278.
- 31) 谷川健一編集：前掲書、p. 268.
- 32) 井上頼寿著：前掲書、p. 279.
- 33) 井上頼寿著：前掲書、p. 282.
- 34) 井上頼寿著：前掲書、pp. 282-283.
- 35) 井上頼寿著：前掲書、p. 286.
- 36) 加藤健司：アキの太鼓待つ居籠祭り、『祭礼行事京都府』桜楓社、p. 98, 1993. 6.
- 37) 井上頼寿著：『京都民俗志』岡書院、p. 507, 1933. 9.
- 38) 歩射座一老のO氏から聞いた話である。
- 39) 与力座衆のK氏から聞いた話である。
- 40) 稲垣正浩著：『スポーツの後近代』三省堂、p. 101, 1995. 7.
- 41) 稲垣正浩著：同上書、p. 101.

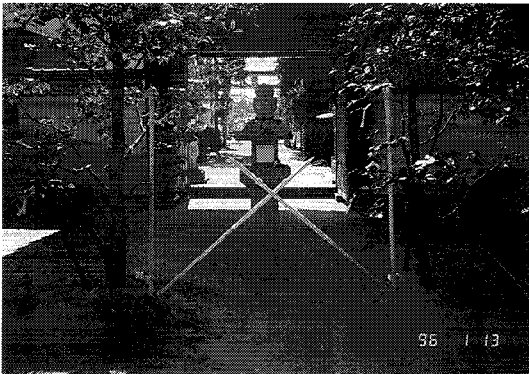
〔資料 1〕 精華町祝園神社の「居籠祭り」の風景



① 祝園神社



④ 網を作る作業



② 祭りの間、鉾を立てておく



⑤ 網の輪の部分を作っている



③ 網を作る作業

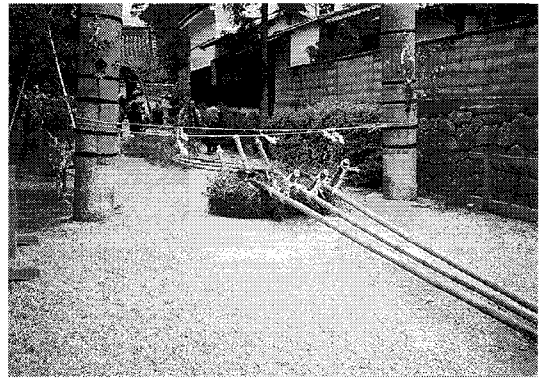


⑥ 網の輪のまわりへ竹を巻きつける





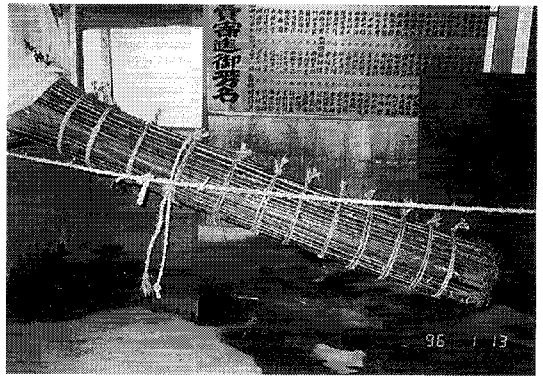
⑦ 綱の中心である輪



⑩ 綱引きが始まるまで鳥居の下へ置く



⑧ 竹の皮をはぐ作業



⑪ 大松明



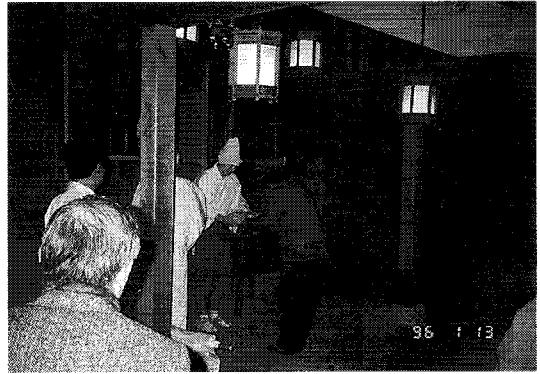
⑨ 輪に竹を左右3本ずつ咬していく



⑫ 社務所前で御祓いをうける



⑬ 大松明に点火



⑭ 神社へ戻ってきた松明奉持者が区長へ五穀を配る



⑬ 大松明に点火



⑰ 宮司が綱の所へ来て、声をかける



⑮ 松明奉持者が大松明を担ぐ



⑱ 宮司の合図で綱引きが始まる



⑱ 綱引き



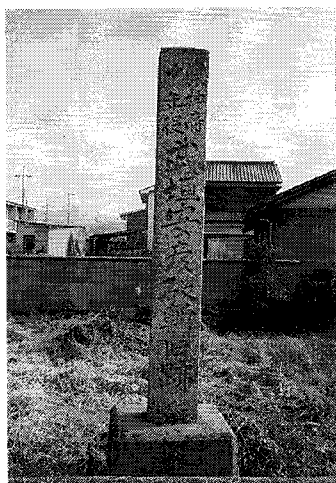
㉓ 綱を焼く



㉔ 綱引き終了後、引っ張っていく



㉕ 綱を焼く



㉖ 武埴安彦破斬旧跡

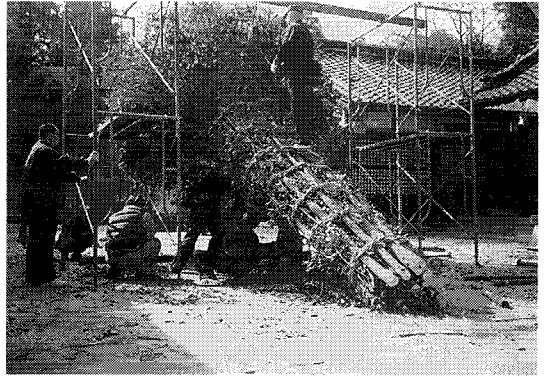


㉗ 浄砂が撒かれている

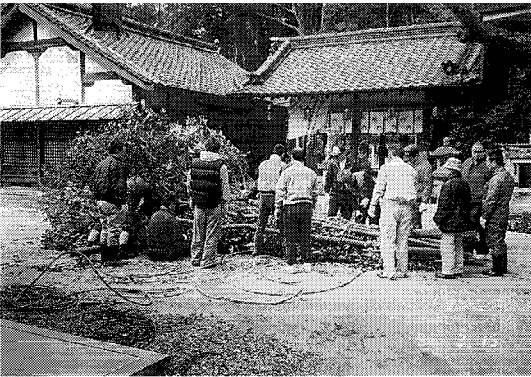
〔資料2〕 山城町涌出宮の「居籠祭り」の風景



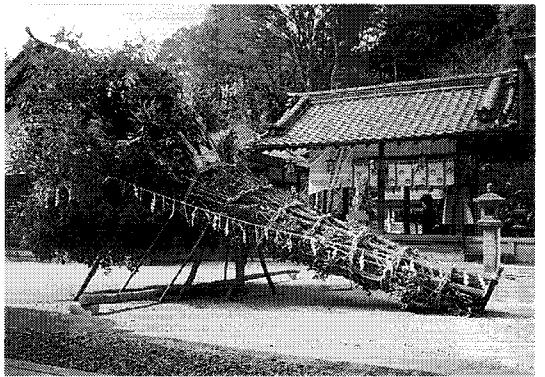
㉕ 涌出宮



㉗ 松明を立てる作業



㉖ 松明を作る作業



㉘ 完成した松明



㉙ 大きな炎で松明が燃え上がる